

ああ父二人

九十歳を過ぎてはいたが、突然倒れた父は入院数日の看護であっけなく昇天していった。今年の桜も散りそめるころであった。

父は苦学力行、徹底節約の明治の代表のような人であった。くつ一足で三十年もおし通し、おはしは戦前からのものを使い続け、ちびてしまいい子供用の長さになっていた。しかし、このように刻苦して貯めた金を、自分の楽しみに使うのを私は見たことがない。たまの外食もカレーかラーメンに限られていた。結局、ひとのために使われていった。

父は貧乏子だくさんの三男に生まれた。貧窮を脱するため大阪に出て、亡母と共に過酷なまでに働き通した。故郷沖繩の一族の子弟たちはその父を唯一の頼りに上阪する。昭和初期のあの空前の不況時である。世話した数は六十を下らなかつた。

父というが、私は養子である。私の実父は父の実兄。二人は十人きょうだいの中で一番仲良しだが、性格は正反対だった。律義節約の弟と違い、兄は大胆おうようで、

二十歳代で町の議員になるほどの派手さ、従って一栄一落も激しかった。広大な屋敷は人手に渡らなかつたが、弟の経済援助によるのであろう。「兄弟の金は困つた時はいっしょだ」と、実父がいつたのを子供心に覚えている。

その実父の命は昭和二十年沖繩戦ですでに飛散しているが、死の日も場所も不明。父を最後に見た人の話では、民や兵の逃げ惑^{まど}う戦場の路傍で父は負傷兵を介抱していた。逃げようとせかしても、「わしの息子が戦地でこんなめにあつているかもしれない」といって、動かなかつたとのことである。

私の二人の父、この兄弟は今ごろ天国で久しぶりの再会を喜んでいるだろうか。

私が老人ホームを計画すると、弟父はくどく念をおしながら、それでも全財産を提供した。最後までひとに捧げた一生のようだ。ああ、父二人。よい父たちよ。

(一九八一年四月十六日)